

北海道がもうかる農業を



佐藤 のりゆき (さとう のりゆき)

キャスター、ジャーナリスト、北海道大学創成研究機構客員教授

1949年札幌生まれ。72年HBC北海道放送にアナウンサーとして入社、94年番組制作(株)テレベックを設立、TV「のりゆきのトークDE北海道」メインキャスターを18年務め、2014年9月までHBCラジオ「土曜は朝からのりゆきです!」キャスターを務める。12年に疲弊している北海道に対し政策提言をする北海道独立研究会を立ち上げる。ソムリエ・ドヌール、医療法人社団延山会理事。主な著書に『のりゆきの痛快対談』『のりゆきの近未来経済』『のりゆきのこれがエッセイ!?!』。

TPPでは「安心・安全」を重要課題に

収穫のイベントが北海道各地で行われる頃となりました。先日、私が行った北広島の牧場の秋のフェスタは大変な賑わいでした。牧場自慢のハムやソーセージ、ベーコンが飛ぶように売れ、ワインやチーズ生産者やパン工房、野菜やパティシエのケーキなどのブースが立ち並び、訪れた人たちは大満足の様子でした。年々、市民の食に関する関心が高まり、農業が注目されるようになったことは大変良いことです。

その農業分野では、ここしばらくはTPP問題を頂点として、政府の農協改革、20年で2倍に増えた耕作放棄地をめぐる農地中間管理機構(農地バンク)、減反(生産調整)廃止など、さまざまな政府提供の話題が出てきました。

TPP交渉では、関税率の攻防ばかりが目立ち、また報道も、関税率の数字のせめぎ合いばかりがクローズアップされてきました。

私は、日本は「安心・安全」を重要課題としてテーブルに載せるべきと考えます。かつてEUの前身のEC(欧州共同体)が、貿易自由化を進める際、TPPで日本のようにデンマークが交渉に遅れて入りました。それにもかかわらず、ドイツと組んで「ハーモナイズアップ」という原則を揚げ、それを加盟国に認めさせました。ハーモナイズアップとは、「上方調和」という意味で、「環境や安全にかかわる上質な規制に関しては緩和せずに、上方に調和させる」というものです。例えば、食品の安全に関する基準の場合だと、厳しい基準を持つ国に合わせるということです。日本の農産物の安心、安全、そして良質さは世界が認めています。ですから、日本もこの原則を掲げてTPPに臨んだ方が良いでしょう。

北海道がもうかる農業を

北海道の農業は、私はTPPを超えた、根幹を強くすることが肝要であると思います。もはや原料供給基地ではなく、北海道がもうかる農業を目指さなくてはな

りません。畑に立つ人、水田に立つ人たちが豊かにならなければなりません。農業者の高齢化、担い手不足、収益が上がらない、などの問題解決は、喫緊の課題です。

北海道の一次産品の出荷額は47都道府県のトップですが、しかし、北海道の美味しい、安全、安心の産物はもっと価値相応に今より高く売らなくてはなりません。道の駅で一本50円のトウモロコシは安すぎます。本州各地には北海道の高価値に見合う価格で売らなくてはなりません。問題は、二次三次加工の付加出荷額が40位以下ということです。例えば、北海道の鮭の加工で日本一は、新潟県の村上市です。北海道は採れたものをすぐ安く売ってしまっているのです。もったいない話です。

国家戦略特区に不採用！

今年春、国家戦略特区の農業分野には、北海道の提案は採用されませんでした。新潟市や、わずか人口2万6千人の兵庫県養父市に決まったのは衝撃です。「北海道はやる気がない」とされたのです。「農業特区は北海道にしたかったが、いくら待っても評価できる改革案が出なかった」と永田町の首相官邸。甘利経済再生担当相は、「補助金をくれという話ではダメ」と厳しく批判しました。「特区は既得権益にぶら下がっている人には都合が悪いが、そこを打破する覚悟が必要だ」と強調、北海道に対しては「何回も提案の出直しを要請した」と。北海道は外国製トラクターの導入コストを下げる規制緩和などを提案していました。

北海道が不採用になったのは、次の理由です。

小粒とされるプランしか出せなかった従来型思考に留まる発想の固さ。

国が北海道を特区に導こうとするアドバイスを見逃す、あるいは拒否する行政センスの欠如。

特区の落選を聞いて、夜中の会見で国の選定結果を強く批判した愛知県知事ほどの気概がない。

北海道の稟議主義的仕事観のキャリア官僚としての

習性が抜けていません。国に対して、みんなの先頭に立って、時には異議を申し入れるのがリーダーであると思います。リーダーシップとは何か、道民で議論しなければならないと思うのです。

国が北海道へ予算を重点的に配分してくれた時代がありました。予算の伸びが止まり、また北海道開発庁がない今、これまでと同じ発想では通用しません。

北海道を活かすのは人、気概と覚悟

北海道は資源にあふれていますが、これを活かすのは、人です。気概とやり通すという覚悟です。豊富な資源に安住しているだけでは、他の地域に競り負けてしまいます。

私の新著作『佐藤のりゆきの新北海道デザイン』では、農業について、このたび5月に全国農協青年組織協議会会長になった北海道の芽室農協の黒田榮継氏と対談しました。彼も、北海道が素晴らしいモデルを提案できなかったことを残念に思い、生産者の意識が高ければ高いほど良いアイデアが生まれると言います。「僕らの使命は、今ある農地を30年、50年後農業をやる人にしっかりした形で渡すこと。そのためにも、北海道の農家がもっと高い意識を持ってチャレンジしていかないといけない」と言います。

北海道農業は規模を拡大して、やがては輸出産業にシフトしてはならないと思います。全国の25%を占める耕地面積があり、高い技術力があるのですから、最も有望な産業です。農業の産出額も、平成21年度の1兆円から20年後は1兆5,000億円になると見る予測もあります。

畑に立つ人が豊かになり、尊敬され誇りを持てるようになれば、担い手不足の問題は解決となるはずで